

聖書の中には「異言」という言葉がでてきます。慣れるまではなかなか「いげん」と読めませんし、何よりも日常生活でほぼ使ったことのない言葉だろうと思います。

この「異言」という言葉は、「舌」という意味も持つギリシア語です。そしてこの言葉は、語る者が自分の知らない言葉を発することとして、新約聖書の中に出てきます。大きくわけて、二種類の「異言」がそこには描かれているようです。

一つはコリントの信徒への手紙一に書いてあります。当時の教会で流行していたのでしょうか、パウロはこの行為について、かなり詳しく書いています。詳しく知りたい方は、13章～14章を見てください。簡単に言いますと、ここで出てくる「異言」は、誰にも意味が分からず、他人には通じなかったものです。本人と神さまとの直接の対話と考えたらよいのでしょうか。

今の教会の中にも、「異言」を語る教会があります。わたしもその礼拝に参加したことがあります。近くで聞いても何を言っているのか全くわからなかった覚えがあります。

一方、使徒言行録に出てくる「聖霊降臨」の場面には、このようがあります。「すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。」(使徒2章4節)

これを「異言」ととらえるかどうかは意見が分かれるところですが、語る者が自分の知らない言葉を発するということでは、「異言」の中に入れてもよいように思います。

この使徒言行録の「異言」の特徴は、他の人たちがその言葉の意味を理解したということです。国や言語が違って、語ったことが伝わっていく。とても素晴らしいことだと思いますが、どうでしょう。

次回は「アイコン」です。楽しみに。



「ペンテコステ」
ティツィアーノ・ヴェチェッリオ (1488-1576)

パウロが彼らの上に手を置くと、聖霊が降り、その人たちは異言を話したり、預言をしたりした。

(使徒言行録 19 章 6 節)

